

兵庫県立大学環境人間学部 研究報告第 17 号 (2015 年)

大学生は自らが「大学生である」ことをどのように意味づけているのか ピア・グループインタビューによるナラティブ・アイデンティティ分析の試み

保坂裕子

人間環境部門

How do they give meaning for “being a university student” ?

Narrative identity inquiry via peer group interview

yuko HOSAKA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: The purpose of this study is to investigate how university students give meaning to their life as a university student. A general meaning of being a university student has been changed by the socio cultural situation. I organized peer group interviews with third year students with one moderator, whom I trained to conduct the interview session as moderator. The moderator probed with the following questions: a) What has changed after getting into the university, b) What do you consider as good/ bad in being a university student, and c) What do you consider as the major differences between public school and private school.

One interesting finding that stood out was that in contrast to their high school identity, they see their new identity as university students as being more independent and autonomous – particularly in terms of defining the choices they make. However, they also express a strong need for concrete guidelines to follow. In addition, they start reflecting on how this desire for more institutional scaffold actually contrasts with their newly gained sense of freedom and autonomy. It seems they are facing with the dilemma here, but they think wondering between these dilemma means being a university student after all. How we can support them and research awaiting are discussed.

Keywords: narrative inquiry, peer group interview, identity dilemma

問題と目的

かつて大学への入学が一部の限られたものにだけ許されたことであった時代は終わり、1990 年代以降は少子化もあいまって望めばいずれかの大学への入学はかなうと

いう全入時代となった。経済的理由などの諸事情により大学へ進学しない者もあるが、数字の上では、全入の時代といえる。もちろん、希望する大学への入学がかなわない場合も少なくなく、受験は依然として大きなハードルであり、第一志望校への入学がかなわなかった学生、

つまり不本意入学の学生の抱える課題、それにとまなう途中退学の問題も増えている(鶴田, 2002)。ただし、第一志望の大学へ入学することが大学への適応へとつながるとも言えず(大隅ら, 2013)、大学における適応については、学習面での困難とともに友人関係のあり方(大久保, 2005)などの人間関係や社会関係に関わる問題の増加が指摘される(谷島, 2005)など、大学生の不適応への対応が求められている(及川・坂本, 2008)のが現状である。学力低下、大学の高等学校化や大学への適応困難など、大学教育のあり方が問い直されるなか、大学生自身の「大学生であること」についての意識も、変わってきているのではないか。社会的に守られた環境としてある「学校」から「社会」へ出ていく最終通過点としての大学において、大学生たちは自らの在り方についてなにを考え、何を感じているのであろうか。

溝上(2010)は、このような時代とともに起こっている社会経済的状況の変化などに伴って、若者の適応の形態も変化してきていると指摘する。個人のありようと、適応すべき外的環境の関係を捉える際に、既存の価値観を取り込むかたちで自己を適応させていくアウトサイドインと自らの価値基準を優先するインサイドアウトという適応のタイプ分けにもとづき、年代ごとの若者の適応形態の変化を分析している。1970 年代ごろから、大学生を含む若者は自己の内側にポジショニングし、そこから外側(就職・大人・社会・その他)に向かうインサイドアウトの力学のなかで学生時代を過ごし、社会へと出て行くこととなった。学生時代をインサイドアウト型の適応によって過ごした者も、就職とともに再びアウトサイドイン型の適応へと移行し、社会とうまく適応していたが、つづくバブル崩壊と就職氷河期を経て、進路指導からキャリア教育へということばの転換に表されるように、より自身の価値や生き方を重視するインサイドアウトによる適応のスタイルが優勢となった。このことが、大学生が社会に出てから経験することが多いといわれる適応困難と何らかのかかわりがあるのかもしれない。「私らしい生き方」を見出し、社会へと適応していくというのは、青年期の課題として位置づけられてきたものであり、大学全入時代の現代においては、大学生にとっての重要な発達課題として位置づけることができよう。

社会の変化に伴う大学生一般の変化は上記のようにまとめられるかもしれない。しかし、実際にいま大学生活を送っている学生たち各々は、このような社会状況の変化や大学の位置づけの変化のなかで、そのことをどのように感じ、みずからを大学生としてどのように理解しているのだろうか。本論では、いま現在大学生活を送る大

学生たちが、自らの大学生としての経験をどのように意味づけているのか、つまり大学生としてのアイデンティティを問うてみたい。

アイデンティティはエリクソン(1980, 1982)の提唱した概念として知られているが、現在もなお、その定義や研究方法については議論が重ねられているところである(鏑, 2014)。本論考においては、自らが何者であるのかを他者に語る物語りとして理解することを試みる(保坂, 2014)。アイデンティティの語りは、自らの過去の出来事をそのとき、その場において想起し、なんらかの意味的つながりを持たせる行為であり、私たちは自らの人生について物語の形式で意味づけることによって、理解する(Bruner, 1986; 1990)。なかでもバンバーク(Bamberg, 2012a; 2012b)は物語りのなかで相互に交渉され、協働生成されるアイデンティティを三つのジレンマのなかでとらえることを提唱した。その三つとは、①他者と「おなじところ」と「ちがうところ」の間にみられるジレンマ、②行為主体性をどこにおくか、についてのジレンマ、そして③現在と過去に及ぶ一貫性を保たなければならないことへのジレンマである。わたしたちは、自らが他者と同じであるところ、似ているところを見出すことで仲間であることを主張する一方、異なるところをみいだすことによって、自分らしさ、独自性を主張したり、あるいは、相手と自分とは同一カテゴリーに収まらないことを示す。つまり、他者との共通点や差異を見出しつつ、それらをどのように主張し、また対話のなかで交渉していくかが、アイデンティティ・クレームとなる。また一連の語りのなかで、自らを主体的意図を持った能動的行為者として位置づけるのか、あるいは自らの意思と反して、あるいは関係を持たず受動的にある出来事に関わっていると位置づけるのかによっても、その語りのなかで自らをどのように位置付けたいのかを知ることができよう。さらに、わたしたちは社会生活を営む上でも、一貫した人間であることが重視される。つまり、過去の出来事に登場する自身のありようと現在の自分自身のなかに一貫した意味づけが必要とされる。過去と現在に大きな違いがあるのであれば、なぜ、どこがどのように異なるのかについての物語りが求められるというわけである。これらの意味づけは、現在進行形の対話のなかで、また聞き手と語り手との関係において実践されるものである。大倉(2011)はアイデンティティを、個人が「このようになりたい(このような者であるはずだ)」と思って能動的・主観的に形作っていく側面と、「いつの間にかそうになっていた(他者からそういうものとしてみなされていた)」という受動的・客観的側面とが折り合うところに成り立つ

(p.21)と記している。また、こういった対話は、社会的産物であり、語り手個人や当該の対話グループのみならず、語り手たちが属する社会や文化、価値観について多くを示してくれる(Riessman, 2008)。したがって、対話が誰に向けられていつ、なぜ語られたのか、また、それがいかに語り手たちの間で交渉されていくのかを分析することで、彼らの依拠する社会的、文化的価値観を知ることができるだろう。ここでは、大学生の友人同士が大学生活、またこれまでの自らのありようとの差異や共通点などを語り合うなかで創出される物語りを分析することで、近年の大学生が持つ「大学生であること」の意味を探ってみたい。

本研究では、現在の大学生が自らが「大学生であること」をどのように意味づけているのかを、大学生になってから変化したことを中心に語り合ってもらうことによって、検討することを目的とした。多くの大学生にとって、大学での4年間の学生生活が、「学校」生活の最後となる。社会との接点となる大学での生活と、それまでの学校生活は彼らにとってどのような意味をもつのであろうか。学生が自らの学校経験をどのように意味づけているかを知ることによって、今後の学校教育の在り方について考察することが可能になると考えられる。

研究方法

本研究では大学生が、大学進学へ至るまでにどのように進路を選択してきたか、また「大学生である」という現状についてどのように認識し、意味づけているのかを、友人との語り合いのなかから検討してみたい。そこで本研究では、現在友人である大学生同士が大学生になってからの生活やそれ以前の生活の差異などを自由に語り合える場を設定することで、＜いま＞を共有する者同士が互いにその違いや同じところを確認しあえるようグループインタビューを設定した。

グループインタビューにおいては、研究者が自らの研究テーマに基づいて構成した質問項目に基づき、データを収集し、最終的には仮説やモデル構成を目指す方法である(田垣, 2007)。質的研究において用いられるグループ・インタビューには、フォーカスグループやフォーカスグループ・インタビューといった類似した用語があり、また多様な定義がある(川島, 2013)。フォーカス・グループ・インタビューについての論文は主に、ビジネスやマーケティングの領域において多く見られたが、近年ではその他の社会科学研究領域において質的研究が注目されるときともに多くの専門領域において採用されるようになって

きている(Morgan, 2001; Vaughn, Schumm, & Sinagub, 1996/1999)。ヴォーンら(1996/1999)によると一般的にフォーカス・グループインタビューにおいては、綿密な準備が前提とされる。とくに、研究目的を明確化し、十分に訓練されたモデレーター(司会者)が手引きを用いて進めることが重視され、グループのサイズ、対象の選定、実施場所も重要である。インタビューは導入、ウォーミングアップからはじまり、用語の明確化を経て、やさしい質問、答えにくい質問、そして要約ののち、終わりの言葉で終了する。とくに青少年に対するフォーカス・グループの適用に際しては、ネット効果に配慮し、見ず知らずの人であるべきだとも指摘されている。しかし、対象とするグループのメンバー選定は、研究テーマに応じて行われるべきであり、本研究においては、友人同士で語り合うことによって生み出される対話にみられる相互作用を重視したため、既知の大学の友達グループを対象にインタビュー調査を行った。グループインタビューのメリットとして、ともすれば非日常となってしまう個別のインタビューとは異なり、グループの特性を生かすことで、より日常生活に近づくことができる(Flick, 1995/2002)という点からも、日常の大学生活を共にしている友人グループを対象とすることが本研究のテーマに即していると考えられた。

グループインタビューにおいてはとりわけ、メンバーの構成がインタビューに大きく影響を及ぼす。障がいをもつ子どもの母親とその支援を行う施設職員とのグループインタビューを行った東村(2012)は、メンバーに施設の職員が入っていたことのメリットとして、母親たちがリラックスして話すことができたこと、また立場の違いによる語り方の違いが明確になった点を挙げている。しかし、メンバーに支援施設の職員がいたことによってあえて語られなかったことがあったことを、その後の個別インタビューで見出し、メンバー構成による限界として指摘した。グループインタビューにおいては、メンバー間の対話が重視されるため、メンバーの選出が重要となる。本研究においては、日常の友人関係を尊重するため、モデレーターも友人である学生が務めた。このことから、本研究の調査方法は、ピア・グループインタビューとした。なお、モデレーターとなる大学生に対しては、本インタビューへむけて、研究方法や進め方について十全な準備トレーニングが行われた。

インタビューは、公立大学3年生の友人グループを対象として、モデレーター1名の他、4〜5名の参加者によって実施された。ここで分析対象としたインタビュー事例は、すべて女子学生を対象としたものであった。本論

執筆者は、教員であるという立場上、インタビューの場に同席したが発言は控え、学生同士の語り合いの場の観察を行った。

インタビューの実施

- ・ 方法：ピア・グループインタビュー
- ・ 時間：各グループ約 1 時間程度
- ・ 実施時期：2013 年 1 月から 2 月
- ・ 場所：大学演習室
- ・ 対象：公立大学 3 年生の友人グループ
 - ・ グループ I（女 5 名＋女 1）
 - ・ グループ II（女 4 名＋女 1）
 - ・ グループ III（女 4 名＋女 1）

本インタビューは、大学生がモデレーター役を担っており、公立大学の大学生としてのアイデンティティを考える際に重要となる話題を適時導入することによって進められた。インタビューにおいて、モデレーターらが導入した共通する話題は、主に次の三つであった。

- ・ 大学生になって変わったこと
（これまでの学校生活との違い）
- ・ 大学生であることのメリットとデメリット
- ・ 公立大学と私立大学との違い

大学へ入学後、友人関係となったメンバーであったために、はじめに、参加者の出身地や高校までの経験について簡単に語ってもらい、その後は会話の流れに任せ、モデレーターが適時質問を差し挟んだり、発言を求めたりすることによって進められた。

ピア・グループインタビューで得られた発話は、参加者の了承を得て IC レコーダーで録音し、そこからトランスクリプト（逐語記録）を作成した。そのデータを読み込み、過去の出来事についての言及とその意味づけをひとまとまりのナラティブとして抽出し、ナラティブ・データとし、分析対象とした。

次に、これらのピア・グループインタビューにおいて語られたナラティブを分析し、3 つのグループに共通してみられた点についての分析を試みた。とくに、それぞれのグループでみられた参加メンバー相互の対話における掛け合いの場面に着目した。そしてその語りの分析を通して、大学生自らが「大学生であること」をどのように意味づけているのかを検討してみたい。

結果と考察

各グループにおいて見られた語りを、テーマのまとまりごとに分類し、何が語られたのか、という語りのテーマに着目するテーマ分析を行った(Riessman, 2008)。グループ I では 23、グループ II では 13、グループ III では 11 の語りテーマのまとまりに分けられた。これらの語りを大きく大学に入る前と入学後にわけ、大学生になる/なったときの語りに着目して分析を試みた。まず、高校生活や大学進学決定において、何がどのように語られたのかについて考察を試みる。以下、発話の具体例については、その特徴をよく示していると思われるものを、各グループより選択した。

●高校までは、流れに乗ってきた

高校生のころの特徴として語られたことは、高校までは「流れ」にのっていただけで、何事もつねに「だれか」に決められてきた、ということであった。高校生までの生活においては、自らが行為主体としての意思決定をしたという経験が欠如していたことがすべてのグループにおける語りにおいて強調されていた。高校に共通する文化的風土として、進学が「当たり前」であり、大学進学は「義務教育」のようなものとして位置づけられていたようである。調査を行った公立大学の学生の特徴として、多くは進学校といわれる高校を卒業した学生が多く進学してくる。そのため、高校による大学進学への方向付けが彼らの意思決定に大きく影響していたといえよう。自らが選択してきたというよりもむしろ、当たり前の流れにのってきた、というのである。

データ 1：大学進学はあたりまえ

C: そもそもずっとお母さんに、大学は楽やで〜緩いで〜って言われとって、だから大学生なりみたい。中学の時から高校のことより大学のこと言われとって、いい大学行ったらめっちゃ遊べるからいい大学行きみたい。そのためにいい高校行けって言われてた。いい大学の基準は分からんけど、大きい大学に行けば就職もいいところけるし、いろんな人と関われるし、遊んでばっかりやでって言われとって、早く大学生なりたいな〜って思ってた。

Mo: みんな親は大卒なん?

C: いや、おとんは専門。

A: うん一緒。

Mo: 大学に行ったのは、自分の意思で来たやろけど、親から言われてっていうのもあるん?

B: 何も言われなかった。行きたくないんやったら、行かんでもいいし。

D: 高校が進学校やど。
 C: あ——
 B: 働いてなかったよな。
 みんな: うん、なかった。
 C: そもそも大学行くのが当たり前と思ってたからな。
 Mo: 進学が当たり前みたいなの。
 B: そうそう、大学の先に仕事があるみたいなの。
 C: そうそう、流利的にな。
 B: 高校行くのと同じで大学来たって感じ。
 みんな: そうそうそう。
 C: それが義務教育よな、全部入れて。

またこの傾向は、志望校の選択においても見られた。自らの学びたい内容や将来の展望に応じて大学、学部や学科を選択するというよりも、国公立か私学かで分類されており、「私立に行くのは格好悪い」という学校文化のなかでは、国公立への進学しか選択肢として準備されていなかったと認識していたようである。

データ 2 : 大学の選択についての語り①

Mo: Cも推薦かな？
 C: そう。私も。まあ学校が、私英数クラスっていうクラスで、そこでそのクラスの底辺やけど一応入って。なんかとりあえず、私立に行くのは格好悪いって感じで。やからなんとしてでも国公立入ろうってなったときに、徳島大行くと思っとたんやけどそれはセンターに点取れそうにないって先生に言われて、やったら推薦でどこ行けるやろうってなったときに、県大と、えっとどこやったかな……都留文(都留文科大学)とどっちがいいって言われて。でも都留文で山梨やが。で、兵庫県やしてこでこっちになつて。
 Mo: そうなんや。じゃあMoもCも先生が道を示してくれて、それで選択していった感じ？
 C: うん、そう、やなあ。
 M: うん。親には特に何も言われることなく。
 C: でも私めっちゃ止められたけどね。お母さんはまだ別に行きたいなら良いんやないって言うてくれてたんやけど、もう、おばあちゃんが絶対あかんって言われて。もう徳島で、四国大学でもええから徳島でおれって言われて。そこはほんまにずっと許してくれんかって。ほんまに泣きながら先生に相談したこともある。
 全員: あーそうなんやー。
 C: でも、私もおばあちゃんの言うとおりにしもしたかったし、でも国公立行かないかんし、で、もー。苦しかった時期やな。
 Mo: そうかー苦しかったなあ。
 C: そうやそんな感じや。

データ 2 : 大学の選択についての語り②

A: まず、関西圏の大学に行きたかったのと、あと、んー、絶対国公立に行きたいのがあって、それは資金面もやし、なんか高校の雰囲気的にも国公立が推されてたから、行きたいって思った。そんで、本当にセンターで点が取れなかったのもあるし、正直こしが無かったっていう、選択肢が狭かった、っていうんがある。地元は絶対離れたかったしなー。
 Mo: そうかー。
 A: あ、でも地元を離れたから分かる地元の良さとか分かるし。
 Mo: そうやんな。じゃあ公立にしたのは資金面……
 A: うん、そうやなー。もやし、世の中は私立の方が多し、それに埋もれたくなかった、っていうのじゃないけどー、なんか名の知れた私立やったらええけど、まあ行くにしてもそんなええ私立行けんし、しかも国公立ってなったら「お〜」ってなるしー。
 Mo: ああ、そうやな、ブランド感というか。
 A: そう。なんか高校のそういう雰囲気の中できたから。
 Mo: なるほどな。国公立が一番良い……みたいなの？
 E: 一番良いというかー、他に選択肢が無かった。考えなかった。滑り止め、って感じ。

もちろん、結果として公立校への進学を果たした学生たちによる意味づけであり、同じ高校からであっても私立校へ進学している学生の意味づけとは異なるであろう。しかし、彼らにとって公立大学へ進学した、ということが自らの大学生としてのアイデンティティを支える大きな部分であると理解することができる。そしてそれは、そのことに価値をおく環境である高校までの文化のなかで過ごしたことが大きく影響していることは間違いない。

大学への進学、また受験大学の選択においても大きく影響を受けてきたと考えられる学校(高校)文化により、みんなと同じ流れに乗りたいという欲求が強く、推薦入試で進学を決めてしまったことに対しても、みんなが通った道を共有したいと感じ、センター試験を受けていないことで流れから外れてしまったとさえ感じていたようだ。

データ 3 : みんなと同じ流れに乗りたい

B: なんか、センター試験受けたかってん
 A: 受けたかった？
 E: 受けたかったん？
 D: なんだと？
 A: 受けなくていいよ〜
 B: なんか、これまでずっと勉強してきたのに、推薦枠で受かったから、なんかみんなセンター忙しかったとか言うて、みんなが乗り越えてきた道やのに、自分通ってへんから、「あ、通ってへん」「あ、通ってへんねや」み

たいな感じで

A: 若干疎外感がある

B: そう

Mo.: 寂しいな

B: 解いたけどな、家で、新聞で

A: ああー、偉いな

たとえそれが、狭い価値観の枠組みであつたとしても、彼らにとってはとても大きな意味を持ち、そこで共有されている「当たり前」の文化は、＜わたし＞の成り立ちに大きく影響していることがうかがえる。これらの語りは、大学進学における選択、また決定の責任主体は本人ではなく、他者（学校の文化や教師）にゆだねられていたと当人たちが認識していることを示すものであつた。そしてそのことは、高校までの自分のありようと現在大学生としての自分を見つめる時の大きな違いとして語られた。

次に、大学生となってみて、みえてきたこと、わかつてきたことに関する語りを分析する。

●大学は自由だけど、責任もある

高校までは、誰かに与えられたことをこなすことに忙しく、そのことが充実感を与えてくれていたが、大学はそれまでとは大きく異なっていたようだ。与えられる宿題や定期テストは、いやなものではあつたが、目標設定を容易にしてくれるものでもあつた。しかし大学でのテストや授業は、そういった強制がないのと引き換えに、充実感を与えてくれるものでもなくなってしまった。真剣に取り組むべきものは、もはや与えられるものではなく、自らが選択し、設定しなければならなくなった。そうしなければ、充実感を得ることができないのだ。

データ 4 : 大学では、自分で目標を見つけなければなら
ない

Mo.: …高校のときって何で充実しとった？

A: 宿題？

E: うん、宿題。与えられたもので、それをこなすので精いっぱいやった。
やけん、充実というか、そういうことを考えることも、

Mo.: 忙しかったよなあ。

…

M: もうそんなときは宿題なんかいやじゃーみたいなのやったけど、

A: 高校のときは定期テストとかがあつたから目標設定がすごくしやすかつたんやけど、大学生になると、テストっていっても微妙なテストやし、点数とか順位とか張り出されるわけでもなく、結果に対するフィードバックも

無い状態で、…なんかなあ。その…高校時代のようにこれに向かって頑張ろうっていうのは、自主的に設定しないと真剣になれるものっていうのが、充実感を得られるもんが無いんやと思う。

Mo.: 自分でやっていかないかな。逆に、なんもせんかつたらなんもせんてええもんな。

A: そう。誰もなんも言わんし。

E: うん。

Mo.: でもやっぱ皆何かを見つけてやろうって気持ちがあつたんや。みんな、真面目なんや！

C: うん！！そうやな！（笑）

全員:（笑）

Mo.: やっぱあれやんな。このままではいかんという焦りとか、

A: そうそうそう。

Mo.: 心配とか、将来のこととか、皆、真面目なんやわ。ぶん・いい子が多いと思うな、この大学。

これまでのように、誰かが目標を設定してくれるわけではない大学では、自らがそれを見つけ、設定しなければならない。これまで先生や親が担ってくれていた主導者、引率者の不在は、彼らを自らの人生における行為主体にしていくのだろうか。これまでのようにはだれも目標や課題を与えてくれなくなり、自らがはじめて自分の道を探り始めたこと、それが大学生である、と彼らには感じられているようだ。与えられた課題をこなしてきた高校までとは異なり、自らの責任において、何を選択するのが迫られている、それが大学生を大学生である、と認識させている。

データ 5 : 大学は目標がはっきりせず、ひっぱって
くれるひとがいない

Mo.: 高校よりは勉強ができて、視野が広がって、自分の意思を自由やからこそ持てるようになったと。

C: 経験も色んな経験でできるようになったしな、縛りがない分。

B: 就活がさ、やっぱり感じるやん大学に入ったら。やからしっかりせなあかんなどは思うけどな。

A: 大学入ってデメリットが、なんかだらけてまうというか、もうちょっと危機感を持ちながら生活したい、目標とか、なんやろ…なんか物足りんひんなってるな。もっと打ち込めることが、まあ探さんのが悪いんやけど…

B: 今までがだつてが一ってやってきとうもんな。私だってそんなに、高校受験でが一ってやったのはあるけど、そんな…

C: 私今の方が忙しいから。

Mo.: 人によって違うな。

B: これやらなあかんていうのがない。別にやらんくても自分の責任やし。

A: 誰かに言われて必死にやっとなのがなくなるとなんか…

C: まあそれがある意味自分の責任よな、やるのも自分、やらんのも自分

…

B: そこで頑張れる人ってどんだけおるんやろって思うけどな。今の段階で。

分からんけど、基本こんなちゃん(笑)

C: うん、基本大学生こんなやで。そん中ですごい人がちょくちょくおる。

Mo: やりたいことを見つけてるってこと?

C: やりたいこと見つけて、あえて自分で茨の道を進むみたいな。

A: 主導者がおらんよな。

C: そう。引率してくれる人がおらん。

B: まあやりなさいって言われんもんな。

A: もう自由って感じ。

C: だから大学生って感じ。

もちろん彼らは、これまで自ら選択したことがなく、すべて言われたとおりにしていたというわけではない。その時々で、悩み、選択してきたはずだ。しかし、高校までの生活を振り返り、今過ごしている大学での生活とを比較するとき、とりわけ責任ある行為主体となることが大学生であることを自覚する大きな要素となったようだ。それは、自由であるとはいえ責任を伴う苦しいことでもあるが、そのただなかにいることこそが、彼らにとって大学生である、ということなのだということを意味する。どこに目標をおいて生活するかということはしたがって大学生としての自分を意味づけるうえで、大切なトピックである。

大学生になり、自らの主体性をいかに位置づけるかという問題に直面することになったが、このことは、高校までの彼らの在り方がまったく変わってしまったことを意味するものではない。依然、「主導者」を求める一面もある。また、彼らの大学生としてのアイデンティティ・クレームとして、次のような語りがみられた。

データ6：不真面目では公立には来られない

C: あと多分、公立よりはぶっこんでる子の割合が多いみたいなそんな感じがある

A: ああー

C: 見た目的にも中身のにも。

Mo: 慣れでそうなる?

C: わからへん。ぶっこんでる子しか私立に入れへんみたいなんがあるのかもしれないけど

D: そうなんかな?

C: いや、わからへんけど

B: え、でも結構ちゃんとしる子多いから

C: うん、ちゃんとしる子が多いんやけど、え、だからなんていうん? あんまり成績良くなくてさ、大学には行こうみたいな人も私立には入るわけやんか。まあ有名私立には入れへんけど

Mo: 公立ダメで、行く子もおるからね

C: 高校の私立は賢いと思う、まあ、あんまり賢くないところもあるけど

A: そうやな

C: 大学も、そう、びんきりやな。国立に来ようっていう時点ですごいからな。

あんまり不真面目なこは来られへん、とは思う。

A: うん、確かに

Mo: なんか、大学どこ? って聞かれて公立やって言ったら賢っ! って言われる

E: それは、ある

C: ちょっと、ちょっと待ったほうがいいな。そんなこと、無いと思うみたいな

Mo: それ言われるたび「ん?」でてる

B: でも一番バカなとこやでって言っとる

C: そうや。

Mo: なんで下げてんねん

B: でもそれで関西の子は笑ってくれるけど、関東の子は笑わへん

C: 地域の差は大きいな

A: ユーモアがね

対象者が在籍する大学は公立校であることから、それとは異なる大学の形態として私立校についての語りがあり、その違い（のイメージ）において、自らの公立大学の大学生としてのクレームがみられたといえる。それは、大学によってももちろん違いはあるものの、公立大学へ通っている自分たちは「まじめ」であるとの位置づけであり、そのことが偏差値の高さとは直接関係がないとしても、公立校へ通っている自らのアイデンティティを支えるものとして機能していると考えられる。

国公立を目指し、いま、公立大学の大学生であることは、彼らにとっては大きな意味を持つ一方で、いわゆる有名国立大学とは異なることを考えれば、世間一般でどのように認識されるかは気になるところであろう。そのことが、誇りであり、また同時にそれほど誇れるものでもないという、相反する意味づけのジレンマのなかで、同じ大学に属する友人たちがその位置づけの探り合いをしている様子がわかる。またこのようなジレンマは、高校までで支配的であった国公立大学への進学が彼らの価値観として大きな影響力を持ち続けていること、しかしそれが揺らぎ、転換しようとしていることの表れとみることができるのかもしれない。公立大学の学生であることが、卒業後過去の出来事となり、改めて意味づけられるときに、その意味づけも変化していくのであろう。

総合考察

今回のピア・グループインタビューにおいては、高校までの経験は主に受動的であった自分を語るものであり、そこから大学生になった今、行為主体であらなければならないという要請に応じようと努力・葛藤している大学生の様子がみられた。

大学生としての語りは、大学生になる前の自分、とりわけ高校までの自分自身の在り方との差異において語られた。高校生活においては、主体的選択をおこなうのではなく、勉強や部活動など一生懸命に取り組んでいたのは自分自身であったとしても、それに向かう動機を支えていたのは、つねにそれを与える「誰か」の存在であったと語られた。つまり、ひとつひとつの行動を行っていたのは自らであることに違いはないが、それは行為主体として選び取ったというよりは、そうすることになっている、という「流れ」にのっていたということになる。もちろん、その流れに乗るかどうかを決定する主体であったともいえるが、インタビューのなかでは、語り手たちの受動的な自らの位置づけがなされていた。

高校までとは異なり、主体的に自らの道を選び取らなければならないと感じている彼らは、どのようにその道を見出せばよいのか、戸惑っていた。これまでの頑張ってきた自分を肯定しつつ、しかしその頑張る対象は与えられてきたものであった。与えられた課題を忙しくこなすことによって得られていた充実感は、課題を与えられなければ、向かうべき方向を失ってしまう。その目標を与えてくれる人がいなくなったことによって、自ら目標を設定し、頑張らなければ望んでいる充実感は得ることができない。高校生の頃とは異なる立場におかれたことにより、変わらなければならない自分、変化を求められ、また自らも求めていることを共有しつつも、それがなにであるのかはまだ見いだせていない。このような語りのなかに、「大学では自ら主体的に学び、活動しなければならない」と大学生活にまつわって流布している言説への応答を感じることもできる。「主体的であれ」という要請に、なんとか応えようとしているのである。

ただしこのような状況は、みんなおなじであり、たいへいはこのような状況ではがんばれない、つまり目標が見出せず立ち止まった状況にある自分の大学生としての過ごし方は一般的なものであり、普通である、としつつも、一方でそんななかでも「すごいひとがちょくちょくおる」のであり、みんなが同じように目標が見つけられないまま充実感を得られない状況であるわけではないことが指摘される（データ 5）。自分で自分の道を見つける

こと、またそこへ進んでいくことは、「茨の道」であり、なかなか踏み込めるものではない。しかし、自らの進むべき道を探し出し、歩いていくことが大学生として求められていることである。そのことを認識しつつもやはり困難であるため、まだ今もどこかで「主導者」、「引率者」を求めている現状にあるという葛藤（ジレンマ）がインタビューでは示された。そしてそのような状況であることが、まさに彼女たちにとって「大学生って感じ」を意味するのであった。

充実した大学生活を送るためには、これまでのように誰かに目標や課題を決めてもらわなければいけない、決めてほしい、と考える半面、決められるのではなく自分で探し見出すのが大学生であるとするジレンマ、また自らの道を見出すことは茨の道をゆくことであり、自らの進む道が見つかることとよいが、茨の道を行きたいというわけではないというジレンマ、そういったジレンマのなかで大学生はいま「大学生である」現実を生きているのであろう。高校生のころまでの充実、課題に追われ、忙しくしていたことによって得られた充実していると感じられていたのかもしれないと考えつつも、現在もさまざまな予定を詰め込み、忙しくすることで充実感を得ようとしている自分がある。これが大学生としてのジレンマにみるアイデンティティのありようといえるのであろう。高校までの受け身の学び手としての位置づけから、大学に入った途端、学びの積極的な主体であることが求められる。ここも高校から大学への接続において、スムーズなサポートが求められる点でもあろう。現状において大学生となった者たちが、どのようなかたちでこのジレンマと直面しているのか、またそのタイプ分類や接続において求められる支援のニーズについても今後調査していく必要があるだろう。

溝上(2010)は、『学生の消費生活に関する実態調査』の結果を参照し、その内実と解釈には注意しなければならないとしつつも、1990 年代後半以降、かつての勉強しない大学生像は払しょくされ、大学生は「まじめに」大学へ通い、勉強する勉学志向へと変化してきていると分析する。その一方で、大学の高校化と揶揄されるように、大学においても指示を待ち、言われたことのみをそつなくこなす学生が増えていることを嘆く教員も少なくない。当の大学生たちは、自分自身のやりたいことをみつけ、その道を進まなければならないと頑張っている。大学生にとって大学生活への適応は、大学での学びをおろそかにし、学外での活動に熱中することによって得られるものではなく、かといって大学での勉強だけに熱中してえられるわけでもない。大学での学習を充実させ

ながらも、学外でのサークルやアルバイトなどの活動にも幅広く取り組んでいる学生の適応感がもっとも高いという新たな大学生像が見出されつつある。したがって、大学生活の過ごし方とその成長をみる際には、大学での過ごし方のみならず、大学外での活動や学びも充実させることができるような大学のありようが今後求められるのではないかという指摘もなされている（溝上, 2009）。与えられることで充実していた高校生活から、大学での新たなアイデンティティを模索するとき、自らの茨の道を見つけられなければ、せめて多様な活動へ参画することによって、忙しさによる（疑似）充実感を得ることが、現代の大学生の「大学生」としての過ごし方なのかもしれない。

ただし、自らの価値観、関心に基づき、学びや諸活動に主体的に取り組まなければならないとする大学生の認識は、彼ら自らの主体性が求められているという認識、主体的でなければならないという社会からの要請を受けたものとして価値づけられているのであり、環境への適応に対して現在の大学生が感じているのは、主体的であれというメッセージに他ならない。そのメッセージに応えようと努力することも、ある意味適応的態度といえる。明確な外からのメッセージは示されなくなったのかもしれないが、彼らは暗黙のうちに発せられるメッセージを敏感に感じ取り、大学や学外での多様な活動へ参加し、充実した生活を求めて適応しようとしている。それは、与えられた価値観への無条件の適応から、自らの見出した価値ある茨の道へと続いているようだ。

就職活動において求められる履歴書にも、大学生活において取り組んだことを記入する欄が複数設けられていたり、努力したことを5つあげてください、と面接で尋ねられるという。つまり、卒業後に進んでいく社会は大学時代に学業以外の多様な活動に取り組んでいることを良し、あるいは当然としており、またそれを学生に求めている。これは、溝上(2009)にあるように、多様で幅広い経験を積んだ学生のほうが成長がみられるという、新たな大学生像に根差すものであるのか、あるいは、企業が多様な活動を求めるため、それに応じられることが大学生の充実感や成長できた、という感覚につながっているのか。この点も、検討していくことが必要であろう。

90年代の社会の心理学化を指摘した斎藤(2003)は、それに続くコミュニケーション偏重主義によってアイデンティティの課題は、キャラ獲得と維持の問題へと変遷していると分析する(斎藤, 2013)。コミュニケーション偏重主義とは、「かつては高く評価された「勉強ができる」「絵がうまい」「文才がある」といった才能は、いまや対人評

価においてはほとんど意味をなさなくなりつつある」のであり、代わって「対人評価は、ほぼコミュニケーション・スキルの巧拙によってのみ決定づけられる」ことを指す。コミュニケーション能力が高く、どのような場においても自らの「キャラ」を獲得し、維持することができることが求められる能力であるとするならば、一つのことに打ち込むことよりも、さまざまな活動に関わり、それぞれの場においてそれなりにうまくやっていくことができる能力こそが、人間関係、社会関係において求められているのだと、大学生は気がついているのかもしれない。それ故に、学外にも活動の幅を広げ、バランスよく対人関係を維持することが彼らの活動動機を支えているのかもしれない。したがって学外での活動についても考慮に入れながら、インタビューを組む必要があるだろう。

最後に、大倉(2014)は、ナラティブによるアイデンティティ研究の在り方に対し、語られないものの位置づけ方に対する疑問を呈しており、ナラティブ・アプローチの研究者のなかにも、物語が事実に基づいているかどうかを問わない立場から、当然それに即しているとする立場までの違いがあり、その定義があいまいなままであると指摘する。そして、語られないものも含め、語りからこぼれ落ちるものを調査者自身が内省・言語化していく方法として「語り合い法」を提唱している。確かに、ナラティブ研究は、ともすると語られたもののみを分析の対象とし、語られないもの、語りえないものをどのように位置づけるかを論じないできたかもしれない。しかしナラティブを、そのとき、その場における実践としてとらえ、分析を試みるとき、発話者と聞き手、双方の語り合いが分析の対象となるのであり、今回のようなグループにおける語りを分析の対象とすることにより、それぞれの立場からの発言がぶつかり合い重なり合うなかで、語りが次第に構成されていく様子を分析することも可能になるのではないだろうか。そこにさらに調査者の分析が加わることで、語られないものを分析対象としていくことも考えられる。友人関係のなかでのアイデンティティ・クレームを分析可能とするピア・グループインタビューは、他者との関係のなかで相互構築されていくアイデンティティ・クレームを検討する際には有用である。もちろん、いまを生きる大学生の語りのなかに彼らが追求しようとしているものを見出すようなさらなる研究の工夫を重ねていくことも必要であろう。

参考・引用文献

- Bamberg, M. (2012a) Why narrative?. *Narrative Inquiry*, 22(1), 202-210.
- Bamberg, M. (2012b) Narrative practice and identity navigation. In J. A. Holstein, & J.F. Gubrium, (Eds.) *Varieties of narrative analysis*. Los Angeles, CA: Sage.
- Bruner, J. (1986) *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. (1990) *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and society*. W.W. Norton: N.Y.(エリクソン E.H. (1980) 『幼児期と社会 I・II』 仁科弥生 (訳) みすず書房.)
- Erikson, E.H. (1967) *Identity: Youth and crisis*. W.W. Norton: N.Y. (エリクソン, E.H.(1980) 『アイデンティティ——青年と危機』 岩瀬庸理 (訳) 金沢文庫.)
- Flick U.(1995) *Qualitative Forshung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. (フリック, U. (2002) 『質的研究入門——<人間の科学>のための方法論』 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) 春秋社.
- 東村知子(2012) 「母親が語る障害のある人々の就労と自立——語りの形式とずれの分析」『質的心理学研究』 11, 136-155.
- 保坂裕子(2014) 「ナラティブ研究の可能性を探るための一考察: <Who-are-you?>への応えとしての<わたし>の物語り」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 16, 1-10.
- 溝上慎一(2009) 「「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討」『京都大学高等教育研究』 15, 107-118.
- 溝上慎一(2010) 『現代青年期の心理学: 適応から自己形成の時代へ』 有斐閣選書.
- Morgan, D. L. (2001) Focus group interviewing. In J.F. Gubrium, & J.A. Holstein(Eds.) *Handbook of interview research: Context and method* (141-159). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 及川恵・坂本真士(2008) 「大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ」『京都大学高等教育研究』 14, 145-156.
- 大久保智生(2005) 「青年の学校への適応感とその基底要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討」『教育心理学研究』 53, 307-319.
- 大倉得史(2011)『「語り合い」のアイデンティティ心理学』 京都大学学術出版会.
- 大倉得史(2014) 「語り行為の力学に着目したアプローチの方法論」 鐘幹八郎 (監修) 『アイデンティティ研究ハンドブック』 ナカニシヤ出版.
- 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二(2013) 「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討」『青年心理学研究』 24, 125-136.
- Riessman, C.K. (2008) *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 斎藤環(2003) 『心理学化する社会——なぜ、トラウマと癒しが求められるのか』 PHP エディターズグループ.
- 斎藤環(2013) 『承認をめぐる病』 日本評論社.
- 田垣正晋(2007) 「グループインタビュー」やまだようこ (編) 『質的心理学の方法——語りを聞く』 (114-123) 新曜社.
- 鐘幹八郎 (監修) (2014) 『アイデンティティ研究ハンドブック』 ナカニシヤ出版.
- 鶴田和美(2002) 「大学生とアイデンティティ形成」『臨床心理学』 2, 725-730.
- 谷島弘二(2005) 「大学生における大学への適応に関する検討」『人間科学研究 (文教大学人間科学部)』 27, 19-27.
- Vaughn, S., Schumm, J.S., & Sinagub, J.M. (1996) *Focus group interviews in education and psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage. (ヴォーン, S.・シューム, J.S.・シナグブ, J. (1999) 『グループ・インタビューの技法』 井下理・田部井潤・柴原宜幸 (訳) 慶応義塾大学出版会.)

謝辞

本研究におけるインタビュー調査にご協力いただいた方々に感謝する。また本研究のモデレーター役を担っていただいたゼミ生のみなさんに感謝します。

(平成 26 年 9 月 30 日受付)